

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、8月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（8月）

令和6年7月31日  
愛媛県

1 気象予報（高松地方気象台）

1か月予報 7月25日発表（7月27日～8月26日）

〈 1か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低10並10高80% 高い見込み	少30並40多30% ほぼ平年並の見込み	少20並40多40% 平年並か多い見込み

〈 予報のポイント 〉

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

期間の前半を中心に太平洋高気圧の張り出しが強いため、向こう1か月の日照時間は平年並か多いでしょう。

2 病害虫の発生予想

水 稲

(1) いもち病（早期：穂いもち、普通期：葉いもち）

ア 予報の内容 発生量：（早期）やや少～並 （普通期）やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、葉いもち発生圃場率は早期、普通期ともに平年並、発病度は早期で平年並、普通期でやや高い。

(イ) 7月1～23日までのBLASTAMによる葉いもち感染好適条件出現の判定では、感染好適日が7月1～2日に7地点、14～16日に7地点で認められているが、それ以降は認められていない（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 窒素質肥料（中間追肥、穂肥）の過用を避ける。

(イ) 圃場観察に努め、葉いもち発生圃場で病勢が進展している場合には、早急に薬剤防除を行う。

(ウ) 今後、出穂期となる水稲では、穂いもち対策として出穂期の基幹防除を実施する。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、早期でやや多、普通期では発生を認めていない。

(イ) 普通期の茎数は、やや多い。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 早期では、止葉から下位3葉の葉鞘に病斑を生じると収量に影響するので、登熟後期の病勢進展が予想される場合には、追加防除を行う。

(イ) 普通期では、発生状況により応急防除を実施する（要防除密度：穂ばらみ期の発病株率 15～20%）。

(ウ) 薬剤が株元までかかるように散布する。

(3) セジロウンカ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、早期、普通期ともに平年並の発生である。

- (イ) 予察灯では6月第5半旬から7月第3半旬に多く捕獲され、特に、西条市や松山市、松前町では連続して捕獲され、捕獲数も多かった(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、飛来後の増殖にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 普通期で箱施用剤を処理していない圃場では、発生に注意する。
- (イ) 防除は薬剤が株元までかかるように行う。

(4) トビイロウンカ

- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査において、東予の1圃場で成虫を確認している(掬い取り調査：1頭)。
- (イ) 予察灯での飛来は、愛南町で7月5日(平年7月22日)に初確認(1頭)しているが、連続した飛来は認められていない。また、その他の地点では未確認である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、飛来後の増殖にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察により、早期発見に努める。
- (イ) 今後、出穂期となる水稻では、出穂期の基幹防除を実施する。特に、普通期で箱施用剤を処理していない圃場では、発生に注意する。

(5) イチモンジセセリ (イネツトムシ：第2世代)

- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査(普通期・第1世代)では、2圃場で発生が認められている。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (イ) 圃場観察により、発生が多い場合には若齢幼虫期(ツトの発生初期：8月上中旬)に防除する。特に、本虫に効果のある箱施用剤を処理していない圃場では注意する。

(6) フタオビコヤガ (イネアオムシ)

- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査(普通期)では、発生を認めていない。
- (イ) 予察灯での誘殺数は、久万高原町で平年に比べやや多いが、その他の地点では平年並である(防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察に努め、8月に密度が急増する場合がありますので注意する。
- (イ) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。

(7) コブノメイガ

- ア 予報の内容 発生量：並～やや多(普通期)
- イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、早期では平年並、普通期ではやや多の発生である。
- (イ) 7月中旬の広域調査では、発生圃場率が17.4%で平年並の発生である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、飛来後の増殖にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (イ) 防除適期は、粒剤では成虫発生最盛期、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後(若齢幼虫期)である。

(8) 斑点米カメムシ類 (早期・普通期)

- ア 予報の内容 発生量：やや多
- イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査(掬い取り調査)では、本田での発生は、早期はやや多、普通期は少の発

- 生である。また、畦畔での発生は、早期で平年並、普通期でやや多の発生である。
- (イ) 予察灯でのアカスジカスミカメの誘殺数は、西条市、松山市、松前町、愛南町で多く、その他の地点では平年並で推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
  - (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場周辺の除草を行う。なお、出穂直前の除草は、カメムシ類を圃場内に追い込む可能性があるため、出穂3週間前と出穂時に2回実施すると効果的である。
- (イ) 出穂期の基幹防除で密度を下げ、乳熟期～糊熟期（出穂後10～15日頃）に地域の防除指針に従い追加防除する。また、多発時には、さらに7～10日後に防除を行う。
- (ウ) 要防除水準は、乳熟期の20回掬い取り調査による虫数が大型種で1頭、小型種で3頭である。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、葉でやや少、果実で平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病果や発病葉は早期に除去し、園地内の病原菌密度の低下を図る。
- (イ) 強風により付傷すると発病が助長されるので、防風垣や防風ネットを整備する。
- (ウ) 夏秋梢では、ミカンハモグリガの食害痕が病原細菌の侵入箇所となるので、防除を行う。
- (エ) 甘平、愛媛果試第48号、はれひめ等の罹病性品種は注意する。
- (オ) 既に発生が認められる園地では、早めの防除に努める。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、平年並の発生である。
- (イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 枯死枝は早期に除去し、適切に処分する。
- (イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が200～250mm（または散布後30日）に達した時である。ただし、本病に対して罹病性の高い品種せとか、河内晩柑、清見等の散布間隔は、累積降水量150～180mm（または散布後25日）とする。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、寄生葉率は平年並、1葉当たりの雌成虫数はやや多の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 園地内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。
- (イ) 薬剤は、かけむらのないように散布する。

(4) ミカンサビダニ

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 7月中旬の定点調査では、発生は確認していないが、巡回調査で発生園を認めている。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 被害果は、その後の発生源となるので、早期に除去し適切に処分する。
- (イ) 被害は、園地内で局所的に発生し始めるので、園地観察を行い、発生後は早期防除に努める。

(5) ヤノネカイガラムシ（第2世代）

ア 予報の内容 発生時期：やや早～早

イ 予報の根拠

(ア) 八幡浜市合田では7月14日(平年:7月21日)に第2世代幼虫の初発が確認され、発生時期は早く、松山市下伊台では7月24日(平年:7月25日)で平年並である。

ウ 防除上の注意

(ア) 防除は、第2世代幼虫初発生から30日後を目安とする。

(イ) 幼虫初発日は、病害虫防除所ホームページ掲載データを参照。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量:並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、果実の発生は平年並である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地観察に努め、発病枝・発病果は早期に除去し、園外で適切に処分する。

(イ) 定期防除に努める。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量:並~やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、やや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 通風、採光を図る。

(イ) 防除は、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(3) フジコナカイガラムシ(第2世代)

ア 予報の内容 発生量:やや多~多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、やや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 防除は、若齢幼虫の発生状況に応じて行い、多発園や常発園では1回目防除の3週間後に2回目を行う。

果樹共通(キウイフルーツ、かき、かんきつ等)

(1) 果樹カメムシ類

(令和6年7月19日付け 令和6年度病害虫発生予察警報(第1号)参照)

ア 予報の内容 発生量:多(越冬成虫) 少(新成虫)

イ 予報の根拠

(ア) 集合フェロモントラップ、予察灯での7月の誘殺数は、全ての地点で極めて多くなっている(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 県内14地点(7月中旬調査)のヒノキ球果の結実量は、殆どの地点において極少ない状況である(表)。

(ウ) ヒノキ球果の果樹カメムシ類寄生虫数調査(10回掬い取り)は、球果のある枝が少なく調査地点が少ないものの、平均捕獲虫数は0.25頭/地点であり、平年(1.25頭)に比べ少ない(表)。

(エ) 山林からの離脱の目安となるヒノキ球果の口針鞘数は、新成虫がヒノキを離脱する25個/球果に達している地点はないものの、5.75個/球果(平年0.9個/球果)と多くなっている(表)。

(オ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的であるが、球果の結実量が極少ないことから、新成虫の発生は少ないとみられる。しかし、球果の口針鞘数が多いことから、新成虫の園地への飛来時期は早くなることが予想される。

ウ 防除上の注意

(ア) 飛来時期や飛来量は園地により異なるため、園地観察を行い、発生を認めたら、各地域の防除暦に従い速やかに防除を行う。特に発生の多い地域では広域一斉防除を実施する。

(イ) 主に山林から果樹園に飛来するため、山林に近い園地での被害が多い傾向にあるので、特に注意する。

(ウ) 果樹カメムシ類は主に夕方から夜間にかけて加害するので、薬剤散布は夕方に行うと効果的である。

表. 果樹カメムシ類 ヒノキ球果調査 (2024年7月調査)

調査地	ヒノキ球果 結実量	10回すくい取り虫数						合計	口針鞘数 /球果
		チャハネアオ		ツヤアオ		クサギ			
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
新居浜市船木	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
西条市丹原町田滝	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
今治市大西町脇	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
松山市立岩	極少	1	0	0	0	0	0	1	9.95
松山市難波	少	0	0	0	0	0	0	0	5.50
松山市栗井	極少	0	0	0	0	0	0	0	2.90
松山市伊台	極少	0	0	0	0	0	0	0	4.65
松山市菅沢	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
松山市久谷	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
久万高原町明神	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
内子町五十崎	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
西予市城川町土居	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
西予市宇和町西山田	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
愛南町城辺緑	極少	-	-	-	-	-	-	-	-
平均 (R6)		0.25	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.25	5.75
平年値 (H26~R5)		1.05	0.06	0.05	0.00	0.04	0.12	1.25	0.9
今年の順位 (H26~R5)		4	9	7	6	7	8	4	1

注) ■ は球果のとれる場所が少なかったため、本年追加した場所

野 菜

(1) 黄化えそ病 (夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量: やや少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、発生を認めていない。

(イ) 媒介虫のミナミキイロアザミウマは平年並の発生である。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は直ちに抜き取り、適正に処分する。

(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が悪いため、発生圃場では5~7日間隔で2~3回防除する。

(ウ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。

(2) 褐斑病 (夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量: 多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、発生は多である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。

(3) 炭疽病 (夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量: 多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査では、発生は多である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。

- ウ 防除上の注意
- (ア) 草勢低下、窒素質肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
  - (イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。
  - (ウ) 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏までかかるように散布する。
- (4) 葉かび病（夏秋トマト）
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の定点調査では、発生を認めていない。
  - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 草勢が衰えると発病しやすくなるので、肥切れしないよう適正な肥培管理に努める。
  - (イ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるように散布する。
- (5) 炭疽病（いちご育苗床）
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の広域調査では、やや多の発生である。
  - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) ランナー、葉柄、小葉に病斑が見られる株は、伝染源となるので直ちに除去する。特に小葉は本病に対する感受性が高く発病しやすいので、この部位を中心に発病把握に努める。
  - (イ) 降雨によって胞子が飛散するので、降雨前後に防除を行う。
  - (ウ) 底面・株元給水は雨よけ栽培との併用で本病の防除効果が高い。なお、頭上灌水を行っている圃場では、夕方遅い時間の灌水は避ける。
  - (エ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるように散布する。
- (6) アブラムシ類（夏秋野菜全般、さといも）
- ア 予報の内容 発生量：少～やや少
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の定点調査等では、夏秋トマトは発生を認めていない、いちご（育苗床）、夏秋なす、さといもで平年並、夏秋きゅうりでやや少の発生である。
  - (イ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺数は、平年並～少で推移している（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
  - (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
  - (イ) 定植時にアブラムシ類に登録のある粒剤を施用するとともに、シルバーポリマルチ等の物理的防除を行う。
  - (ウ) ワタアブラムシは、一部のネオニコチノイド系薬剤の感受性低下が認められている。
- (7) ミナミキイロアザミウマ（夏秋きゅうり、夏秋なす）
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
- イ 予報の根拠
- (ア) 7月中旬の定点調査では、夏秋きゅうり、夏秋なすともに平年並の発生である。
  - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。
  - (イ) 薬剤防除は、薬液が葉裏までかかるように散布する。
  - (ウ) 卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。特に多発時には反復散布を行う。
  - (エ) 雑草でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。
  - (オ) 夏秋きゅうりでは、本虫はメロン黄化えそウイルス（MYSV）を媒介するので注意する。
- (8) ハダニ類（いちご育苗床、さといも、夏秋野菜全般）
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査等では、夏秋なす、イチゴ育苗床でやや多、さといもで平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により早期発見に努め、低密度時に防除する。

(イ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(ウ) 多発圃場では、散布間隔を短くして密度抑制に努める。

(エ) 雑草でも繁殖するので、圃場内外の除草を行う。

(9) コナジラミ類 (いちご育苗床、夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の定点調査等では、夏秋トマト、夏秋なす、イチゴ育苗床で平年並、夏秋きゅうりでオンシツコナジラミはやや少、タバココナジラミは多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 定期的な薬剤散布を行い、葉液が葉裏までかかるように散布する。

(イ) 雑草でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。

(ウ) コナジラミ類には、トマト・きゅうりのウイルスを媒介するものがあるので注意する。

(10) ハスモンヨトウ (大豆、さといも、夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) フェロモントラップによる誘殺数は、7地点中6地点で平年並、西条市のトラップでやや多く推移している(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 7月中旬の定点調査等では、さといもの食害面積率は平年並である。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め(大豆では白変葉の発生)、若齢幼虫期に防除する。

(11) オオタバコガ (夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) フェロモントラップによる誘殺数は、5地点中4地点で少なく、1地点で平年並に推移している(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 7月中旬の定点調査では、夏秋トマト(タバコガ類)での発生は認めていない。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(12) シロイチモジヨトウ (ねぎ、夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) フェロモントラップによる誘殺数は、7月前半は5地点中4地点で平年並、伊予市でやや多く推移している(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並の見込みとされており、現在の発生傾向が続くとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

### 【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは、<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojou/>

### 【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。